

鹿児島県関係史料の来歴

昭和 24 (1949) 年、水産庁は新漁業法の制定にあわせて、全国の漁村・漁業制度関係資料の調査を企図し、「漁業制度資料調査保存事業」を財団法人日本常民文化研究所に委託した。同研究所は漁業制度資料収集委員会を設け、東京月島にあった水産庁東海区水産研究所内に事務局をおき、同年 10 月に同事業に着手した。現在中央水産研究所図書資料館に所蔵されている古文書は、その大半が同事業によって収集されたものである。

ところで、今回目録を収録した「入来家文書」（いちき串木野市）、「川崎吉左衛門家文書」（南さつま市）の二つの資料群は、いずれも鹿児島県に関連するものである。「漁業制度資料調査保存事業」（以下「事業」と略）の開始年度末に刊行された『漁業制度資料目録 第1集 全国篇Ⅰ』（日本常民文化研究所・水産庁資料整備委員会、1950.3）の末尾に付された「漁業制度資料調査保存要項」に、「事業」の収集方針と計画が掲げられていて、昭和 25 (1950) 年度に鹿児島調査が予定されている。しかし、計画通りには進まなかったようで、結局鹿児島調査が行なわれた形跡はない。では、上記の二つの資料群は一体いつ、どのような経緯で中央水産研究所に収蔵されることになったのであろうか。

中央水産研究所図書資料館の「漁業制度資料」（古文書・筆写稿本）は、「事業」の終了後には水産資料館に収蔵され、同館が廃止されて以降は中央水産研究所に移された。鹿児島の二つの資料群が「事業」による調査で収集されていないとすれば、「事業」が行なわれた月島の東海区水産研究所分室か水産資料館に直接持ち込まれたか、あるいは調査以外の経路で寄贈・寄託等の手続きがなされたかのいずれかであろう。今回、目録を刊行するにあたり、現地調査を行なって関係者に聞き取りをおこなった。その際に得た情報も踏まえ、現在判明している限りの経緯を以下に記したい。

<入来家文書>

「入来家文書」は、現在の住所では、いちき串木野市の上名（かみみょう）に本拠を持つ旧家・入来家に伝来した史料である。入来家の詳細は「解題 入来家文書―史料の概要と特色―」を参照していただきたい。「事業」は、原則的に漁村・漁業に関連する資料の収集が目的だが、「入来家文書」にはほとんどそのような資料は含まれていない。資料の内容を吟味すると、明らかに入来家に伝来したと思われるものによって占められ、それ以外の資料が混入していないことから、入来家から直接寄贈・寄託等を受けたことが推察される。今回、鹿児島県いちき串木野市で調査を行い、元高等学校で教鞭をとっておられた所崎平氏、現在は東京青山に居を構えておられる現当主の入来重光氏にお話をうかがうことができた。資料の検討および両氏のお話から、近世期に薩摩藩の郷土だった入来家が明治維新以降、土地経営をもとに、金融、養蚕、鉱山等の諸経営を多角的に展開していたことを確認することができた。また、入来家の東京進出は現当主の祖父にあたる重彦氏からで、父重則氏は東京で開業医をしていた由

である。所崎氏のお話によると、重彦氏の代に、「イズカワという鹿児島大学の先生が（資料を）買い取ったと聞いている」とのことだった。この「先生」は恐らく伊豆川浅吉氏のことである。伊豆川氏は渋沢敬三の主宰するアチックミュージアムの同人として水産史の研究に従事し、戦後鹿児島水産専門学校に赴任した。昭和 24（1949）年に発足した鹿児島大学に同専門学校が包摂され、後に水産学部に改組された。伊豆川氏も同学部の教員となっている。アチックミュージアムは、渋沢敬三によって創始され、後に日本常民文化研究所に名称が変更された。伊豆川氏も、「事業」を担うための日本常民文化研究所内の組織である漁業制度資料収集委員会に名を連ねており、鹿児島の重要な資料を紹介し、寄贈・購入等の仲介の労をとられていたのではないかと思われる。手続きの経過等についての詳細は不明だが、先の「鹿児島大学の先生」云々の伝聞に加え、串木野に拠点を持ちつつ、東京で生活していた入来重彦氏の足跡から考え、「事業」との関連で、伊豆川氏が入来重彦氏と接点を持ち、伊豆川氏の仲介で「事業」の拠点あるいは水産資料館への購入手続きが取られたものと思われる。重光氏のお話から考えると、水産庁が購入する際、資料はすでに東京に移されていたようである。

<川崎吉左衛門家文書>

川崎吉左衛門家文書は、現在の南さつま市笠沙町片浦を拠点に、近世期より定置網等の漁業の網元を担った川崎家に伝来した資料群である。詳細については「解題 川崎吉左衛門家文書―史料の概要と特色―」にゆずるが、本資料群も「事業」との関連を示す書類等はなく、探訪時期・経緯がながらく不明だった。今回の目録を作成・刊行するにあたって行った現地調査では、現当主の川崎伸一氏にお会いすることはできなかったが、それ以前に電話でお話を伺う機会を得た。伸一氏の父吉男氏は、古くは定置網を営んでいたが戦後の漁業制度改革で権利を放棄し、マグロ延縄漁を行う船を新造して航海に出た矢先、ビキニ環礁の水爆実験に遭遇した。第5福竜丸の被曝はこの時のことで、新聞等で大きく報道されたが、その後遠洋のマグロは風評被害で放射能の有無にかかわらず売れなかった。やむなく廃業し、知人をたよって上京したという。吉男氏は東京大学経済学部のご出身とのことで、その頃の知人が東京にいたのであろう。そして、資料もこの頃「事業」の拠点あるいは水産資料館に寄贈・寄託等の手続きが進められたのではないかと推定される。「事業」は昭和 30（1955）年には終了していたが、すでに昭和 28（1953）年には水産資料館は開設されており、吉男氏が東京に出たのも恐らくその前後であろう。

現地調査の際には、南さつま市教育委員会の宿里澄彦氏、郷土史に詳しい坂元春男氏、笠沙町漁業協同組合長の中尾雄作氏にお話を伺うことができた。特に宿里氏には様々なご手配をいただいた。また、いちき串木野市では、高等学校で国語を講じておられた所崎平氏に現地の歴史、近世以来の入来家について様々なご教示をいただいた。東京青山では入来家の現当主入来重光氏に、ご尊父重彦氏のこと等について伺うことができた。記して深甚の謝意を表したい。

（文責 越智信也）